

埼玉県納税貯蓄組合総連合会会長賞

学校法人共栄学園 春日部共栄中学高等学校 三年 扇谷 明子

未来を担う私達と税金のつながり

先月十日に参議院議員選挙が行われた。今年十八歳になる姉が選挙演説を聞いていたので、私も耳を傾けた。「憲法改正」など多くの議論が交わされる中、「税の使いみち（どのような政策を行うか）」と「税の集め方（その財源をどのように確保するか）」についての議論のところでは、内容を理解するための知識が自分達に不足していると痛感したため、姉と一緒に国税庁のホームページを見て税金の知識を深めることにした。

私達の暮らしに身近な消費税は、老後も安心して暮らせるよう、主に年金や医療のために使われるものだと知った。年金の現状として、二十歳からの若者が納める年金保険料収入だけでは足りず、不足分を消費税などの税金で賄っていることもわかった。自分が払った年金保険料が本人の老後に使われないということに驚きを感じた姉は、「私達が老後を迎える頃までに保険料収入がさらに減ってしまったら今の税金制度だけで賄えるのかな。」と不安な顔をした。私も同感だった。

だが、不安要素は年金だけではない。子育て支援や雇用創出、災害時の住宅確保など、必要な公共サービスは他にもあり、全て実現するには多くの財源、つまり税金が必要となる。毎日当たり前で過ごすことができるのは税金のおかげだという認識が薄れ、税金を払うことに抵抗がある人が多い中での財源確保は容易ではない。ましてや、公共サービスはみんなが互いに支え合い、よりよい社会を作っていくためのものだから費用は公平に負担するのが原則だ。となると更に難しくなり、選挙の大きな争点になることもうなずける。私達も、どのような税金であれば納得することができるか姉と意見を出し合った。

熊谷に通う姉は、連日の猛暑に疲れを感じ、まずは地球温暖化がもたらす災害に対処するための税金なら納得できると言った。リサイクルや自動車の排気など、既に対策が進むものも多いが、気温上昇に伴う農業への影響、豪雨被害の深刻化は近年特に進んでおり、待ったなしの問題だと主張した。

私は、今ある「ふるさと納税」のように自ら選んで支払える仕組みを増やしたらどうかと言った。財源確保には、世代や経済力による考え方の違いを超えて、皆が継続して払う仕組みが不可欠と考えたからである。

姉と私は互いに相手の意見に頷き、これからも引き続き考えていこうと約束した。

「働く」＝「お金を稼ぐ」という、当たり前と言える式が今、変わりつつある。経済成長が必須であった時代から働き方改革やコロナ禍を経て、お金だけに頼らない心の豊かな生活を求める若者が増えているからだ。経済の成長が前提であった時代の税金制度だけではもはや限界がきているといえるのかもしれない。選挙をきっかけとして改めて税金のこ

とを考える貴重な機会となった。